

修士課程2年 鄒 芷云 (スウ シウン)

修論題目：「視覚障がい者の博物館参加がもたらす変容とその意義

－兵庫県立美術館と神戸アイライト協会の事例を通じた関係性の考察－

本稿では、本研究の目的は、視覚障がい者の視点および博物館側の視点から掘り下げ、視覚障がい者の博物館参加がもたらす変容とその意義を明らかにすることを目的とした。具体的に、①視覚障がい者の博物館参加が博物館にどのような変容をもたらすのかを検討し、②視覚障がい者と博物館との関係性に内在する可能性を提示することを目指す。

第1章「視覚障がい者の博物館利用に関する先行研究」では、日本における視覚障がい者に関する議論を整理した。また、問題点や課題に注目し、本研究における課題設定を行った。

第2章「調査地概要」では、調査地として選定した兵庫県立美術館と認定 NPO 法人神戸アイライト協会について紹介し、選定した理由を説明した。

第3章「事例調査：兵庫県立美術館-学芸員」では、兵庫県立美術館の学芸員に対するインタビュー調査の結果を概説し・考察を行った。学芸員と視覚障がい者との接点を整理した上で、(1) 繋がりによる認識・理解、(2) 自己省察・課題意識、(3) 館外への繋がり、(4) 館内学芸員同士の相互影響という4つの面から調査結果をまとめて分析した。その中、(1) 繋がりによる認識・理解として、①「違う」・「みんな違う」ことが「みんな一緒」・「一括りしてはいけない」、②媒介としての「言語」の力-意思疎通・伝える情報量・研究蓄積、③鑑賞の方法や意味への再考-作品自体への向き合い・触覚鑑賞の課題、④近い距離・信頼関係の構築に関する示唆、という視点が挙げられた。(2) 自己省察・課題意識として、①個人への反省・自分の枠の至らなさ、②アプローチする意欲の高まり、③能動的な挑戦の可能性・自発的な探索活動、④ノウハウの蓄積と共有の不足、⑤静かになった美術館、という視点が挙げられた。

第4章「事例調査：兵庫県立美術館-監視係」では、兵庫県立美術館の監視係に対するインタビュー調査の結果を概説し・考察を行った。監視係と視覚障がい者との接点を整理した上で、(1) 繋がりによる認識・理解、(2) 見方・自身の姿勢の振り返り、(3) 芽生えた興味・行動、(4) 肯定感と責任感の浮き彫り、(5) 見守る視点と位置づけという5つの面から調査結果をまとめて分析した。その中、(1) 繋がりによる認識・理解として、①感覚の「違い」・意識の「違い」、②境のない芸術鑑賞、という視点が挙げられた。

第5章「事例調査：神戸アイライト協会-視覚障がい者」では、認定 NPO 法人神戸アイライト協会を通じて視覚障がい者へのインタビュー調査結果を概説し・考察を行った。視覚障がい者の博物館参加には主に①未装備・イメージが湧かないガイダンス、②静かさが求められる空間、そして触れることができる機会の少なさや、説明文の文字が小さいなどの不備によって利用に不便にあうことが明らかにした。また、博物館参加による体験について、①感覚的体験による新たな認識、②会話による想像力の誘発、③不思議な雰囲気による気分転換、④共鳴による心理的回復、など多様な体験が挙げられた。

第6章「考察」では、第3章から第5章の内容を統合し、視覚障がい者の博物館参加が博物館側にもたらした変容を考察し、視覚障がい者からみる博物館体験を提示した上で、視覚障がい者側と博物館側の関係性の変化を考察した。最後には、博物館の社会的役割という俯瞰的な視点から、視覚障がい者と博物館の関係性のさらなる射程について議論を行った。

終章では、これまでの議論のまとめ、および今後の課題をまとめた。